

## 論文要旨

### 「在日朝鮮人文学の歴史—1945年-1970年」

宋恵媛

本稿は、一九四五年八月一五日の朝鮮「解放」から約二五年の間に在日朝鮮人たちによって行われた文学活動の歴史を、内在的に辿ったものである。日本語作品だけでなく朝鮮語作品も研究対象として組み入れ、在日朝鮮人諸団体内で発行された媒体に注目し、その文学活動の諸相を描き出した。

本論文は、序章とそれに続く五章から構成されている。

序章では先行研究の検討を行った。まず、従来の研究が、日本語で書かれた作品を主な対象として、世代論やアイデンティティ論から在日朝鮮人文学を論じてきたこと、それと関連して在日朝鮮人文学を「日本文学」との関わりの中でのみ捉える傾向に疑問を呈した。これに関連し、これまで在日朝鮮人文学の嚆矢とされてきた作家・金達寿についての批判的考察を行った。そして、日本の文学界で活躍した日本語作家のみを対象にして在日朝鮮文学史を組み立てることの限界を指摘した。

以上を踏まえ、「在日朝鮮人文学」の再定義を行った。それは、在日朝鮮人による文学的営為のすべてを含み、その国籍、筆名、純血性—混血性を問わないというものである。また、「解放」後の朝鮮南北対立を背景とする朝鮮—日本間の移動者とその文学もその範疇に含めた。このように定義しなおすことで、在日朝鮮人たちの文学的営為を、「日本」や「日本語」の境界を超えて把握する道を開いた。

続く第一章では、在日朝鮮人「女性文学」の実態を明らかにし、その歴史的意味を検討した。植民地期に日本に暮らした一世朝鮮女性たちの文字との関わりから書き起こし、植民地期に教育を受け損なった女性たちの「解放」後の文字への接近と、表現活動について追った。その際に、在日朝鮮人女性の識字と自己表現にまつわる複雑な背景と意味を、日記や手記など様々な形態の文章を手がかりにして探った。

続いて二世女性たちによる創作活動について論じた。具体的には、在日朝鮮人女性

作家の先駆けである詩人李錦玉、『ヂンダレ』に集った女性たち、総連詩人たち、小説を書いた安福基子や庾妙達、文学研究者の任展慧、評論やルポの分野で独自の活動を展開した朴寿南を取り上げた。

以上のような作業を通し、在日朝鮮人女性が書くこと、ひいては「解放」後の在日朝鮮人が書くことの意味の考察を行った。

第二章では、在日本朝鮮人連盟（朝連）—在日朝鮮統一民主戦線（民戦）—在日本朝鮮人総联合会（総連）系列の組織内での文学活動を時系列的に論じた。その活動は、規模や持続性の面から当該時期の文学運動の主流をなすものであったとえている。マルクス主義的傾向を強く帯びていた朝連所属作家たちの最大の目標は、日本文化・文学の影響から脱し、朝鮮の民族文化の復興に参画することであった。その思いの強さは、創作言語に関する深刻な葛藤や論争となって、当該期間の全体を通して表出することになった。

朝連期の文学運動においては、距離的、心理的近さから当初は南朝鮮の動向に関心が寄せられた。だが、米占領軍と日本政府による朝鮮人学校の弾圧や朝連強制解散、朝鮮戦争を経て、次第に共和国へと接近していった。本章では当時の状況を、民戦から総連への移行過程—それは共和国文学への編入過程とも言い換えられる—における組織内部の対立の分析によって明らかにした。その際、金時鐘の主導で刊行された『ヂンダレ』の母体となった大阪の詩サークルと総連主流派の対立を取り上げ検証した。

それと同時に、一九五九年結成の在日本朝鮮人文学芸術家同盟（文芸同）の前身となった在日朝鮮文学会（一九四八年発足）と共和国朝鮮作家同盟（後に文芸総と改称）の直結過程を、共和国資料を基に明らかにした。

次に、共和国への「帰国」実現に後押しされ総連文芸同が開花期を迎えた一九六〇年代の文学活動を、朝鮮語小説の分析を中心に論じた。

最後に、一九六七年の共和国の唯一思想体制への移行に伴って生じた、総連—文芸同の動揺と作品傾向の変化について検討した。そして、この時に総連や文芸同を離脱した作家たちが、一九七〇年前後の日本文学界における「在日朝鮮人文学」という一

ジャンルの形成に大きな役割を果たしたことを再確認した。

第三章では、朝連—民戦—総連とは無縁だった、主として韓国支持派の在日朝鮮人たちによる文学活動について論じた。

まず、植民地期の朝鮮人作家たちの「解放」以後の動向を取り上げた。特に親日文学者の代表的存在であった張赫宙が、一九五二年に日本に帰化をするまでの「解放」から七年間の軌跡を、別の筆名で発表された作品等から詳しく辿った。

続いて『白葉』、『統一朝鮮新聞』、『漢陽』などの媒体から、各時期の書き手たちの「祖国」観や、在日朝鮮人としての自己意識を探った。その過程で、二大在日朝鮮人団体の一つである民団が、総連や文芸同と比肩するような文学活動の拠点となりえなかった事情を明らかにした。また、韓国政府の無関心や警戒心による棄民政策のために「祖国」韓国との距離を縮められず、ひたすら自己の立場の不条理さを内向きに表現していった書き手と、「解放」後に韓国から様々な形で日本へ渡った知識人たちとの接続とすれ違いについても指摘した。

第四章では、「越境と離散」という新たな角度から在日朝鮮人文学史を再検討した。ここでは、在日朝鮮人文学が「解放」後の南北朝鮮への／からの移動という、朝鮮人（作家）やその作品の越境を内包していたことを証明した。ここでいう越境者とは、「解放」直後の朝鮮からの渡日／再渡日者、朝鮮半島のイデオロギー対立を背景とした日本への政治亡命者、朝鮮戦争に国連軍（実質的には米韓軍）志願兵として日本から渡った在日朝鮮人、長崎の大村収容所への収容者、共和国への「帰国」者、そして日本と韓国を行き来した人々である。ここでは、社会学的な世代論による在日朝鮮人文学研究の枠組みに改めて疑問を呈するとともに、とかく用語や概念ばかりが先行しがちな「ディアスポラ文学」としての在日朝鮮人文学を、実際の作品や作家に即して具体的に論じた。

最終章である第五章では、当該時期の優れた書き手たちである金民、姜舜、金石範の三人のバイリンガル作家を取り上げて論じた。特に最初の二人はこれまで正面から取り上げられてこなかったが、本稿では彼等が初期の在日朝鮮人作家の典型ともいう

べき、重要な作家たちであると位置づけた。

小説家の金民は、ほとんどの作品発表を朝鮮語で発表した。彼の小説では、真摯に生きる在日朝鮮人たちの姿、特に在日朝鮮女性たちが、鋭い人間観察に裏打ちされた正攻法のリアリズムの手法で描かれた。同章では日本作品「西粉の抗議」「試写会」と朝鮮語作品「抱擁」「オモニ（母）の歴史」の四編を取りあげ、金民の小説世界を分析した。そして、地道に生きる平凡な在日朝鮮人の姿を小説の中に書き留めた彼の作品群が、一九七〇年代以前の在日朝鮮人文学の理想形を具現したものであると結論づけた。

続いて、南北朝鮮の緊張関係による在日朝鮮人社会の分裂や反目の超越を目指した詩人、姜舜を取り上げた。一九七〇年に刊行された詩集『なるなり』（日本語）を手がかりに、それ以前の姜舜の詩人としての歩みを辿った。本稿では、姜舜がイデオロギーの違いや世代の差を超えて、在日朝鮮人作家、文化人との交流を持ち、また詩作においては周囲の在日朝鮮人を愛情深く描きだした、「民衆詩人」であったと位置づけた。

一九六〇年代末の総連内の混乱時に姜舜は総連脱退を余儀なくされたが、同時期に総連を離脱した作家の多くが、その後日本の文学界を舞台に移したのに対し、彼はその流れとは無縁に朝鮮語による詩作を続けた。このような姜舜の歩みが、共和国にも韓国にも、そして日本にも想定できる読者がほとんど存在しない中での孤独で特殊なものであったことを指摘した。

金石範は、すでに長編『火山島』等で日本の文学界でも確固たる地位を占めており、作家論、作品論も少なくない。本稿では、議論されることの少ない金石範の一九七〇年以前に焦点を当てて論じた。彼は当初は日本語で小説を書いたが、一九六〇年代に入ってから朝鮮語による執筆活動に専念した。だが一九六〇年代末に総連を脱退すると、再び日本語を使って書くことを選んだ。二度の使用言語の転換を行い、また組織内での創作時代には総連—共和国文芸政策の影響下にありながらも、金石範がライフワークと定めた済州島四・三事件を描き続けたことを、当該時期に書かれた作品を通して確認した。また、総連離脱の直前まで金石範が連載していた朝鮮語版「ファサン

ド（火山島）」を、出世作『鴉の死』（日本文）および日本語版『火山島』と比較検討し、金石範が朝鮮語創作時代を経たことが、後年の日本語版『火山島』執筆に大きな影響を与えた点を明らかにした。

そして最後に、総連離脱後に金石範が書いた創作言語に関する評論を検討した。そして、ことばと徹底的に向き合い、朝鮮人が日本語で書くという矛盾との不断の格闘となかで生み出されたものであるがゆえに、金石範文学が日本語による在日朝鮮人文学の新地平を開くものとなったという結論を導き出した。

### 本稿の課題と成果

当該時期の通史的な文学研究はこれまで皆無であり、その意味で本稿は先駆的な研究と位置づけられる。しかし、いくつかの課題も浮かび上がった。それは、組織とは無縁に文学活動を行った人々たちの文学的営みを十分に扱えなかった点、日本人と朝鮮人との混血作家、あるいは日本名作家などを十分に扱えなかった点等である。

一方、本稿での成果としては、一九四五年以後の朝鮮半島をめぐる入り組んだ政治的条件の中で葛藤し呻吟しながら脱植民地化をそれぞれの仕方で追求した、埋もれていた様々な書き手たちとその作品を顕在化させた点を挙げることができる。